

# 歴史学再生のために―歴史実践から考える

書評

菅豊・北條勝貴編著 『Doing History―歴史で私たちは何ができるか?』

(清水書院、二〇一九年)

菅豊・北條勝貴編著

『パブリック・ヒストリー入門―開かれた歴史学への挑戦』

(勉誠出版、二〇一九年)

松原宏之

一

歴史実践とはなにかではなく、歴史学とはなにかと問うために二冊の本を読みたい。渡部竜也『Doing History―歴史で私たちは何ができるか?』と菅豊・北條勝貴編『パブリック・ヒストリー入門―開かれた歴史学への挑戦』で

ある。

博物館展示や郷土史研究、学校教育などにとどまらず、写真をとること、日記を付けること、歴史ドラマをみること。こうした日々の実践を歴史学の外縁やサブカテゴリーとして位置付けるのは不十分ばかりか不適切である。このとき対をなしておさえるべきは、過去について調査し、

歴史学再生のために―歴史実践から考える（松原）

学術的に書くことのみを歴史学とし、そこでおのずと歴史があきらかになると信じることもまた過剰な楽観だということである。研究者たちが紡ぐ歴史（ヘイドン・ホワイトがいうところのヒストリカル・パスト）は、読者や生徒や生活者たちが日々用いている歴史（ブラクティカル・パスト）との接点を介してはじめて意味を持つ。この意味で、歴史実践（ブラクティカル・パスト）こそが包括的・日常的であり、ヒストリカル・パストはその下位にあるにすぎないのである。

本誌小特集「今を映すもう一つの歴史記述―偽史・オカルト・歴史実践」の一環としてこの書評は書かれるが、この副題の意味は右の文脈でとらえねばなるまい。まっとうな研究者が関知しない周縁的営為としての歴史実践が、偽史やオカルトといった怪しげな現象とともにあるとみては的を外してしまう。むしろ逆である。人が用いるさまざまの物語のなかに歴史実践があり、研究者らがつくる狭義のヒストリカル・パストは容易にはそこに一席を占めないのである。

もしも歴史学（ヒストリカル・パスト）が日々の歴史実践（プラクティカル・パスト）への通路を確保しようとするなら、知恵と技法が要る。専門知によって客観的にあきらかにされたはずの「ヒストリカル・パスト」がそもそも

いかなる来歴や性質をもつのかを検討せねばならない。歴史が探られ、知られ、理解され、用いられるいくつもの局面や、その担い手のありようをとらえ直さねばならない。それは、過去をあきらかにし、それを叙述し、読み手、聴き手、そして使い手たちと共有する歴史学の営為全体を点検し、刷新する作業である。ここに評する二冊は、この剣呑な作業に挑む試みである。

## 二

歴史教育の場面に即して、この作業に献身するのが渡部竜也の『Doing History』である。

多くの学校教員を育ててきた渡部の教育現場への愛憎は深い。世間で歴史離れが起きていないことは、「ひこにゃん」、城郭ブーム、歴史に素材をとったテレビ番組やマンガなどの人気を想起するだけであきらかである。不人気なのはひとり歴史教育とりわけ高校での歴史科目であり、それを支えている歴史学である。この現実を見よと渡部は言う。教室での講義内容や教育方法から、高校教師の育成過程、採用慣行にまで及ぶ渡部の叙述は手厳しく、個々の指摘の可否は本書を読んだうえで判断していただきたい。しかし歴史科目の不人気の原因は何かという渡部の問いは重

大で、目を背けることができない。

煎じ詰めるところ、渡部は実証主義的な歴史学の原因を求め、最大のポイントは、歴史学の科学性をつきつめようとするとする実証主義者たちが、現代に生きる人びとの価値観や問題意識から距離を取ることである。主観を排して客観的であろうと努める歴史家たちは、人びとの関心に寄り添うのをむしる避けようとする。

この実証主義の方法で育成された教師たちが生徒たちの関心に応えることは原理的に難しいと渡部はみる。ヒストリカル・パストを探究する専門家たちにとって、生徒たちがかかえるプラクティカル・パストとの連絡路を探ることは副次的ではない。史実の追究を通じた社会貢献への志向や信念はあっても、真理が自ずと社会的に有用な知であると想定する実証主義史学には社会や生徒との接点をあえて探す契機が存在しないからである。この実証史学の方法を受け継いだ教師たちの努力は、実証された正確な知識を生徒たちに伝授することに向けられる。それは自ずと、史実の一方的な注入へと傾向づけられる。そしてその努力は生徒たちの関心と呼応しないと渡部は言うのである。

こうした現状診断のうえで本書は、状況を打開する二つの試みを吟味する。ひとつが構成主義の取り組みであり、もうひとつが実用主義からの提案である。

史苑（第八一卷第二号）

歴史の教え込みでなく、歴史家たちが史実を発見（構成）していく「歴史的思考」の修得を生徒にうながそうとするのが構成主義の方法である。歴史情報それだけを手渡すのではなく、歴史家たちが史料をどう読み解き、いかなる根拠で、どのような推論をするのかという技法を共有する試みと言える。

もつとも、渡部は構成主義の取り組みに四点にわたって懐疑的である。①史料の厳密な読解と出典確認は、実際には権威主義に近づく。それらしい権威を装ったフェイク情報を見破れない。②証拠や論拠に基づく歴史の推論も、複数説を比較するレッスンの産物として、どちらの言い分にも一理あるといった悪しき相対主義を涵養する。③歴史的文脈への配慮も、できごとの追認を奨励する結果となる。小林よしのりが植民地主義を擁護して展開したような、当時は仕方なかったという議論の誘発である。④年代順の思考は、始点から終点にいたる物語の形式をとる。これをもって大きな物語をかたると、唯物史観やシステム論といった説明は揺るがない事実かのように学習者に伝わってしまった。結局は史実の教え込みと大差なくなるのを渡部は懸念する。

そこで渡部が推奨するのが実用主義である。歴史を実証史家に専有させずに、現代社会を理解し、民主主義の発展

歴史学再生のために―歴史実践から考える（松原）

というコモングッドに資するように編成しなおすべきだという。歴史の学習が、生徒たちの関心や課題に解決の糸口を与え、かれらが切実に納得しうるプラクティカル・パストになること。これが唯一、なぜ歴史を学ぶのかという問いに答える道だからである。

本書『Doing History』の提案は（渡部の広島愛がうかがえる挿話も含めて）具体的であり、一読の価値がある。ここではいくつかの断片の紹介にとどめて、実用主義を教室に持ち込むイメージを得たい。①「来歴を知る」―とりわけ根拠の来歴を知ること。相撲協会が土俵に女性があがることを拒否するときの根拠は何であり、歴史的にみてその可否をどう考えるか。②「教訓を得る」―歴史研究者に評判のわるい教訓すなわち歴史的類推だが、一般人がよくやるこの種の議論を批判的に吟味する練習。保守系論壇での歴史シミュレーション論議など教材は多い。③「人に伝える」―広島島のいわゆる原爆資料館での展示をめぐる論争の研究。④「たら・れば」を考える―過去の蛮行批判は現在主義を呼び込みがちだが、一般に成功とみなされるべきことを再検討するレッスン。⑤「歴史を乗り越える」―和解という目標をかかげて、たとえば植民地主義経験国の歴史理解それ自体の変遷を学習する。

本書の宛先が学校教師たちだけでないのは明らかである

う。副題に掲げられたのは「歴史で私たちは何ができるか？」である。歴史を歴史研究者たちの世界だけに閉じ込めるような歴史学は、いずれ社会的な意義を失う。社会の改善（コモングッド）に資する機会を逸して、俗説の跳梁を許してしまう。歴史学よ、そして歴史学者よ変われ、同書はこう訴える。

### 三

歴史学を変革しようとする意志は『パブリック・ヒストリー入門』もまた共有している。

「パブリック・ヒストリー」とは、狭義には専門的歴史研究者が大学の外に出て、博物館や史跡はもとより、映画やゲームの制作、法廷、郷土史から家族史の調査・執筆などの場面で、その知見を社会に還元しようとする試みを指す。こうした活動とともに携わるのは専門家にとどまらない一般市民であり、この意味で広義のパブリック・ヒストリーはひろく人びとが関わる歴史実践である。そこには、歴史研究だけでなく、本書でも紹介される日記を書くということ、なにげなく写真を取ること、その日記や折々の写真を見かえすこと、系図を肴に親睦を深めること、過去のできごとにまつわるブログやアプリをつくること、受け継

がれた神楽や囃子を演じること、映画をみたり旅行をする  
ことなど無数の行為がありうる。

ただし、パブリック・ヒストリーをなにか新しい領域と  
して紹介することが本書の中核ではない。「入門」と掲げ  
るけれども、本書は初学者への文字通りの案内でもない。  
本書の豊かさは、執筆者たち自身が、歴史学の担い手や史  
料の見いだし方、共有と検討の仕方、発信の仕方などを広  
げていく様子を記録したところにある。自らの仕事を歴史  
学の拡張の観点からとらえなおしてみたと言っても良い。  
共同研究に巻き込まれるうちに、専門家たちが多くの一般  
人とともに「パブリック・ヒストリアン」になつていく、  
あるいはそのことに気づいていく過程をドキュメントした  
ことで、思わぬ臨場感が醸し出された。パブリック・ヒス  
トリーを既存の歴史学の外側にある余技とみるのではなく、  
研究者たちが自らの仕事の中にパブリック・ヒストリーの  
な要素を発見してしまうのである。

したがって、第一部をなす理論編において、菅豊の簡明  
な見取り図に続けて、北條勝貴と中澤克明がヒストリカル・  
パストとプラクティカル・パストとの二分法を修正するの  
はよきガイドである。科学的歴史学（ヒストリカル・パスト）  
の特権性を、その生成期にさかのぼって洗い直さねばなら  
ない。日本においては、近代的な国家をつくらうというし

ごく実用的な目標のために、それまでの歴史観を支えてい  
た漢学、国学、種々の物語などが選択的に排された。古い  
歴史に取って代わったはずの客観的なヒストリカル・パス  
トを駆動したのは主観的・実用的な要請であり、なおかつ  
徹底した引用主義にみられる儒学考証学の影響など、プラ  
クティカル・パストへと追いやったはずの諸実践との連続  
性も多い。自然主義文学、スピリチュアリズム、民俗学な  
どにひそむ実証志向などとあわせて考えるなら、科学的歴  
史（ヒストリカル・パスト）と民間的・非専門家的歴史実  
践（プラクティカル・パスト）との区分はそもそも脆いも  
のでしかない。

第二部の歴史実践を本書は六つのテーマに分ける。すな  
わち、①「歴史家とは誰か」、②「協働」、③「オーラル・  
ヒストリーとライティング・ヒストリー」、④「ミュージ  
アムとアーカイヴズ」、⑤「デジタル・パブリック・ヒス  
トリー」、そして⑥「アートと歴史映写」である。いずれ  
もパブリック・ヒストリーの広がりやうかがわせるが、重  
要なのはそれらが歴史学の外側にある実践としてではな  
く、歴史学者の範疇と歴史学の営為自体を拡張するよう  
に位置付けられることであるう。

テーマ①は「歴史家」の範囲を拡張する。備中神楽を調  
査するなかでのできごとを記した俵木悟は歴史家の位置に

歴史学再生のために―歴史実践から考える（松原）

いるわけだが、各地の祭礼を見物してまわる若手神楽太夫たちもまた歴史家であることに俵木は気づく。民俗学者俵木にそもそも違和感はなかっただろうが、太夫たちがかつてはカセットテープ、今ではビデオや携帯電話を用い、YouTubeを検索しながら調査を進めていく様子は、文書史料に頼るだけでは難しいまことに豊かで実用的な調査技法である。かれら太夫たちにとって過去・現在の神楽実践の研究は実際に演じることではじめて完結するのであり、「歴史研究」は調査・観察から実践へとおよぶ一連の過程であらざるを得ないことが示される。あえていえば、十全にこの過程を踏破するのは研究者でなく若い太夫たちだということになる。

歴史家の境界が溶解・拡張していくのはテーマ②「協働」においていっそう顕著である。「八重子の日記」のブログ化から冊子化と読者コミュニティの形成を追う宮内泰介は基本的に伴走者である。「八重子の日記」を読み、コメントをつけ、注をつけ、勉強会でまた一緒に読むのはブログや冊子の読者であり、八重子の孫世代の家族であり、地域の人びとであった。宮内が助言者として介入するものの、専門家コミュニティにとどまらないこの人びとのサークルでこそ「八重子の日記」という史料は読まれ、記憶と思考を誘発し、議論になるのであった。

こうした学びあうコミュニティの生成は、地震と津波によって被災した民俗資料を加藤浩治が学生とともに救出し、あらためて展示するなかでも起きたことであった。移動博物館に持ち込んだ漁撈用具、聖地金華山にまつわる祈禱札やパンフレット、捕鯨船員が持ち帰った土産物を前にした聞き取りや対話から、また別の展示テーマが生まれていく循環である。史料という過去を専門家が読むのは歴史実践のほんの一コマにすぎない。史料を繙き、史料群の並べ方を思案して、それを誰かと共有するなかからこそ、歴史をめぐる思考が誘発され、見解の修正や調整がうながされる。保存されるだけの史料は死蔵されているのであり、専門家にしか読まれるない論文は歴史の死産だという示唆であらう。

証言をあつかうテーマ③においても、金菱清は研究者による聞き取りの限界を論じる。代わりに舞台の中央に進み出るのは当事者である。二〇一一年の東日本大震災で家族を失った遺族から亡き人に宛てて書かれた手紙には、調査者がとうてい聞き出し得ないと金菱が述べるような辛さが綴られていた。遺族本人もが無意識下に抹消しようとしていたできごとまでが、調査者という第三者でなく、亡き人という二人称の相手に宛てるときに思いがけず書かれることがあると言う。手紙の執筆をうながす程度の介入者の位

置にまで調査者が下がってはじめて、当事者は蓋をしていた過去の記憶やできごとに気づき、それを自ら言語化してはじめてある種の癒やしと始末とにいたるのである。聞き取りを突き詰めようとするという意味で調査者主体と言わざるを得ない「オーラル・ヒストリーの敗北」であり、当事者が自ら筆をとることをうながす「ライティング・ヒストリー」にこそ可能性があると金菱は論じてみせる。

テーマ④「ミュージアムとアーカイヴズ」、⑤「デジタル・パブリック・ヒストリー」、⑥「アートと歴史映写」が、歴史を発信するときの三つのメディアをそれぞれあつかっていることは一目瞭然であろう。歴史が伝えられるのは書物だけではない。そして、写真、映画やテレビ番組、史跡訪問、あるいはゲームやマンガなど、歴史が受容され、消費される場面の広さを想起すれば、これら三つのメディアはほんの一部に過ぎないことも了解される。

それでもこの三つのメディアに即して提示されるのは、人びとが歴史の消費者にはとどまらないことである。「ヒロシマ・アーカイブ」を主宰する渡邊英徳にならって言えば、「資料のフロー化」と「コミュニケーションの創発」がカギである。高校生たちの被爆者からの聞き取りはそこで完結しない。証言や記録をデジタル地図上にプロットしたものをネット上に公開して、それを誰かが見て過去を消

費するのが終着点ではない。ひとつひとつの体験談を「ヒロシマ・アーカイブ」に集めて、それをふたたび被爆者に見せに行くと、そこであらためて対話が生じ、体験の聞き取りがなされ、被爆者は自らの経験と他者の証言とをつなぎ直して新たな発見をする。このとき証言は史料としてストックされるだけでなく、「ヒロシマ・アーカイブ」を囲む人びとのあいだを流通（フロー）し、さらなるコミュニケーションを「創発」する。史料収集それ自体が目的化することなく、いったん集められたヒストリカル・パストが、デジタル地図上で展示されて被爆者の経験を更新し、ふたたび対話や聞き取りが始まるなかで、関係した人びとにとって意味ゆたかなブラクティカル・パストになるのである。大学の専門家コミュニティ内部で産出され一方的に読者に伝達された歴史にはなかなか得られなかった展開を本書は誇る。

#### 四

二冊を重ねて読むなら、歴史学のいまについてふたつのが得心される。

第一に、歴史学はもう孤塁には居られない。実態においても、理論的に整理しても、狭義の歴史学は

歴史学再生のために―歴史実践から考える（松原）

この世界で実にはわずかな領域を占めるにすぎない。テレビでも、書店でも、レストランでも、旅に出るときにでも歴史は語られているけれども、その語り手もネタ元も多くは専門の歴史家ではない。実証史があきらかにする精緻な歴史像を教育の場で伝えようとしても、それは怨嗟の的になっている。一九世紀に日本のアカデミアでも生まれた実証史なるものもまた西ヨーロッパ型国民国家が要請したひとつの知の形態（プラクティカル・パスト）であり、それは他のプラクティカル・パストを排斥するというくせをもったひとつの型にすぎないのかもしれない。

第二に、歴史学刷新への道はすでに開かれている。

『パブリック・ヒストリー入門』の実践編が示した二〇本にもおおよぶ論文とコラムはこのことを示して余りある。ここに記されるものに新しい取り組みは少ない。そここで取り組まれてきた調査や実践は、担い手においても、読むこと、考えること（研究）、語ること（発信）のかたちにおいても実は専門家外に開かれていた。これらをあらためてパブリック・ヒストリーとして位置付け直しうると同書は言うのである。

『Doing History』の実用主義的な教案の数々も、教室で実践可能なものと言って良いだろう。その具体性以上に重要なのはおそらく、プラクティカル・パストに根差す教

育への志向である。史実をそのまま教えても、それは生徒が受容・消化しうるものにはならない。一片のできごとをなにかしら意味をもつイベントとして生徒の側が受けとめるための動機・契機を欠いているからである。渡部の五つの提案はいずれもこの動機や契機の提示を重視して、史実に文脈を与えていく。

さて、両書を外付けの取り組みでなく、歴史学そのものの点検・刷新の提起として読もうとするなら、考えるべきことは多い。読者に託される課題である。

『Doing History』の教案と『パブリック・ヒストリー入門』実践編の事例とは歴史学を再編・拡張していくときの多くの具体例を提示したが、それらはしかし依然としてありうる広がりの中の一端を示したにすぎない。

一方でより日常的、私的なプラクティカル・パストの全容を探究する必要がある。多くの民俗学者の参加を得た『パブリック・ヒストリー入門』は文字史料に偏りがちな歴史学者たちがなかなか手を出せない領域を描いたが、それらはしかし民俗学者・文化人類学者たちにとってはごくなじみの学術的領域である。インスタグラムに投稿すべく刻々と写真を撮り、次々に発信するような日常を人びとは過ごしている。およそ歴史とは関わらないかのような、将来予測からライフコースを夢見る瞬間にも、人は実は歴史



的な判断をしている。いつまでも変わらない日常を生きるつもりの人もまた、循環的な歴史を生きている。この膨大なブラクティカル・パストの世界をはたしてどのようにとらえ尽くすことができるのだろうか。

他方にはより社会的、政治的、あるいは論争的な歴史実践がある。日常の小さな語りを得意とする民俗学者たちに多くを依存した『パブリック・ヒストリー入門』では十分に開拓できなかった領域である。

この問いの延長線上に、歴史学が探究してきた大きな歴史をどうあつかうのかという点に行き当たると。環境、広域世界、国家などの歴史をブラクティカル・パストの水準と交差させる、人びとの価値観や問題関心に引き寄せて考えるとはどういうことなのか。現在主義の陥穽にはまらずにそれをなすとはいかなることなのか。現在から見通しがたいてい前時代、なくなってしまう小世界、もの言わぬ人びとの経験は、どのように視野に入るのか。歴史教育の現場を想定した『Doing History』はこうした問いに応じうるはずだが、そこで提示される和解や論争といった個別具体的なテーマ群を包摂する歴史科目カリキュラムの全体はどのように編成されるのか。

およそ手つかずの広大な課題群が見えてくるのは、両書の強力な提起ゆえである。歴史実践やパブリック・ヒスト

リーを歴史学（ヒストリカル・パスト）の外側に配置するのでなく、歴史学のはらむ狭隘さを解きほぐして拡張へと転じるというならば、そのあり方は熟考する価値がある。歴史学再生への手がかりである。

（本学文学部教授）